

余市の人々。 第3回 【江部拓弥】

戦略推進マネージャーの連載を広報誌で掲載しています！

えっ、どんな棚ですか？
「航空ミステリーが好きなんです。福本和也をよく読んでましたね。航空機関係の本も揃えたりして棚をつくってね。でも、売れなかったなあ」
塩田さんは、まいったなあという風情である。ほかに好きな作家について訊ねると、落合信彦、浅田次郎の名前が挙がった。浅田次郎は歴史ものより『神坐す山の物語』が好きだと言う。山岳ミステリーも好きなんですと、塩田さんは付け加えた。「やっぱり年を取ってから、本を読まなくなりました。本屋が本を読まないって言うたらいけませんね」と、冗談めかして笑う塩田さんである。
「棚をつくったりしていた頃は、景気もよかったですよ。本もよく売れましたから。いまじゃ、信じられません」と、塩田さんはお手上げの仕草を見せる。続けざまに「昔のいい時代を思い出しても、どうしようもなし」と、きっぱり。
たとえ余市で人口が減ろうとも、本が売れないと言われる時代であっても、商売は商売として続いていくわけですからね、そうでしょ。塩田さんが僕に問いかける。僕の頭の片隅には、もやっとした言葉が浮かん

でいるけれど、なかなか出てこない。うんうん。だから頷くしかない。あっ、なりわい。そう、生業。もやっ、が、しゅっ、と像を結んだ頃には、塩田さんが次の話を始めたところだった。
「田舎で本屋をやるって、結構しんどいんですよ。本屋だけれど、本屋じゃないよなって瞬間がいっぱいあるんです」
それって、どんなときですか？
「ベストセラーは一冊も入ってきませんからね」
塩田さんの声のトーンがちょっと上がった。
「田舎にはね、ベストセラーが最初の配本で回ってくることはまずないんです。お客さんに聞かれるでしょ、あれ読みたいんだけど、ないのって。ないですって答えるしかない。いつ入荷するのって、急かされる。お客さんの要望には応えたいから、問い合わせしてみますねと言う。こっちも必死で注文する。それでも、絶対に入ってきません。絶対に、ですよ。売れる本が入ってこなくて、どうやって本屋を運営していくっていうんですかね」
今度は僕にではなく、自身へ問いかけるように、塩田さんの視線は宙をさまよっている。(続く)

※「余市の人々。」は、余市町戦略推進マネージャーの江部拓弥（えべたくや）さんが、余市町に関わりのある人物へのインタビューをもとに執筆し、「WEB本の雑誌。」(<https://www.webdoku.jp/column/ebe/>)に掲載されているものを、転載しております。※掲載日 2020. 8. 31

問合せ 企画政策課 企画グループ ☎21-2117



パブリックコメントの結果について

パブリックコメントの実施結果について、次のとおりお知らせします。

計画などの名称	募集期間	結果	担当課
余市町過疎地域持続的発展市町村計画（素案）	令和3年7月1日 から7月30日	ご意見等はありませんでした	企画政策課

問合せ 企画政策課 企画グループ ☎21-2117



人事異動（8月1日付）

◎余市町発令 【新規採用職員】 ▼子育て・健康推進課大川保育所 主査 槇野 静香